

げたのは、インドの言語調査では初めてのことである。さて、この調査はどのように評価しうるのであろうか。ひとつに、報告書では、不可避に言語と方言との境界を設定せざるを得ないし、「トライブの言語」という枠組みは、しばしば批判的となってきたのだが、こうした諸点について、必ずしも明示的な説明が与えられているわけではない。PLSIでは、言語として措定されたのは780であり、うち「トライブの言語」は480とされている。LSIでは、言語と方言の数はそれぞれ179と544とであったが、この差異がいかんにして生じたのかについては、言語外事実に触れることなしには説明のしようがない。さらに、記述調査に関わるのは主としてインドの言語学者とボランティアの人たちだが、近年欧米の研究者により急速に研究が高まりを見せているヒマラヤとカラコルム地域の言語研究との連携が見られないのは、残念なことである。ともあれ、最終的な評価を下すのは、全ての報告書の刊行を見てからにしよう。

(藤井毅)

日本語の現状への歴史的過程

▶吉村誠『お笑い芸人の言語学——テレビから読み解く「ことば」の空間』(ナカニシヤ出版、2017)は、もとテレビ局のディレクターがたどる戦後日本語史である。古典といえる田中克彦『ことばと国家』をはじめ社会言語学周辺の批判精神が集約され、戦後の日本列島の地域—東京の言語的ポリティクスが解析されている。詳細な批判的検討は『社会言語学』XVIIの書評にゆずる。▶田尻英三編『外国人労働者受け入れと日本語教育』(ひつじ書房、2017)は、技能実習生や看護・介護人材のうけいれほか、近年の施策・現状の諸相がうつしだされている。田尻・大津由紀雄編『言語政策を問う!』の続編といえる。日本語教

育関係者による論集だが、義永美央子・山下仁編『ことばの「やさしさ」とは何か』(三元社)なども参照されている。▶梁英聖『日本型ヘイトスピーチとは何か——社会を破壊するレイシズムの登場』(影書房、2016)は、まさに現代日本型レイシズムというべき現実を言語現象として詳述している。現代日本の批判的解析と差別解消への指針が本旨だが、関東大震災や戦後の動乱期などの歴史的記述も当然ふくむ。狭義の言語研究は参照されていないし、基本的に社会学/民族学の作品だが、筆者は言語社会研究科の大学院生である。

(ましこ・ひでのり)

(言語) 人類学

▶浅井優一『儀礼のセミオティクス——メラネシア・フィジーにおける神話/詩的テキストの言語人類学的研究』(三元社、2017)。植民地期の文書形式から、ある最高首長の即位儀礼の実施を巡る交渉過程、実際の即位儀礼、そして総務省下のフィジー言語文化研究所により記録されたDVDまでを、首尾一貫して言語人類学・記号論の枠組により再帰的に分析し、太平洋を巡る人類学的研究の展開にも切り込んだ意欲的な民族誌。▶カルロ・セヴェーリ『キマイラの原理——記憶の人類学』水野千依訳(白水社、2017)。主にフランス語とイタリア語で書いてきたセヴェーリの著作の、初の日本語訳。口承/文字という二項対立図式の死角に展開する、記憶の生成と継承、さらには儀礼やイメージに関する比較人類学の成果。▶Carlo Severi and William F. Hanks (eds.) *Translating Worlds: The Epistemological Space of Translation* (HAU/ The University of Chicago Press, 2015)。共編者ハンクスは、マヤ語の直辞表現の詳細な民族誌的研究や植民地状況化でのマヤ語の変容の研究で知